

ISSN 0913-9729

KLS 26

PROCEEDINGS OF THE THIRTIETH ANNIVERSARY MEETING

June 4-5, 2005

KANSAI LINGUISTIC SOCIETY

2006

言語獲得における名詞句内での過剰生成

村杉恵子 橋本知子

南山大学

1. 序論

言語獲得にみられる中間段階の解明は、記述的にも理論的にも意義がある。幼児が、一定の時期に、母語のインプットには全く存在しない文や句をあらわすのはなぜだろう。

日本語を母語とする幼児の文法獲得の過程において、(1)のような「の」の誤用が観察されることは広く知られている(永野 1960; 大久保 1967; 岩淵他 1968; Clancy 1985)。(*は、当該の文あるいは要素が非文法的であることを示す。)

- (1) a. きいろい*の はな
b. ほわし おおきい*の ほわし (2:1) (永野 1960: 411)

この種の「の」の「誤用」に関する実証的な先行研究は多い。これらの研究成果を詳細に検討すると、実に多くの矛盾を含む。例えば、他の文法項目の過剰生成に比べて「の」の過剰生成の時期は広範囲にわたる。言語獲得の初期(2歳前後)のみならず、遅くは5歳前後という後期になっても観察される。Murasugi (1991)は、時制や補文標識を獲得している(日本語を母語とする)2;11-4:2の幼児に(2)-(3)のような「の」の過剰生成が観察されたと報告している。

- (2) a. 走ってる*のバーバー
b. お外の食べてん*の象さん
c. 踊ってる*のシンデレラ
d. トウモロコシ食べる*の豚さん
e. お洋服着替えてる*のバーバー
f. エミちゃんの書いた*のシンデレラ
g. 怪獣の食べた*のゴリラ
h. ママ作った*のシュークリーム
i. パパが書いた*のタコの絵
j. あそこのドアの閉まった*の音
k. シュークリーム作ってん*の匂い
- (3) a. ちがう*のおうち
b. 赤い*の帽子
c. すっぱい*のジュース
d. かわいい*の象さん
e. おおきい*のタコ
f. ちっちゃい*のタコ
g. あたらしい*のおうち (Murasugi 1991)

(1)-(3)の「誤って」挿入された「の」は、(4)から(6)のどの文法範疇に属するものなのか。日本語の大人の文法では、異なる要素が同一の音声表示「の」をもってあらわれる。(4)から(6)に示すように(代)名詞(N)、属格、補文標識(C)が、東京方言においては「の」という同一の音声をもってあらわれる(Murasugi 1991)。

- (4) 代名詞の「の」
a. 赤いの(赤い物) b. 母から届いたの(母から届いた物)

(5) 属格

- a. 僕
b. 野
c. 都

(6) 補文

- a. ロプス

これらの要素
までには大き
する説(永野
ある。一方、
法理論による
する仮説を提

本稿は、
素の「の」-
のようにおき
を対象とする
成の「の」の
村杉(1998)で
剰生成」され
要部とを繋

2. 「の」の

本節では、
的に裏付け
などの過剰生
などの準体
と重なる。こ
る。「あむな
になったの

本研究の補
(1968)の述
の属格形+名
おふとん)。
有の意味で

本被験者の
の独立属格形
される名詞

(5) 属格の「の」

- a. 僕の本
- b. 野蛮人の侵入
- c. 都市の破壊
- d. 雨の日
- e. 木の上
- f. 母からの贈り物

(6) 補文標識(C)

- a. ロブスターをたべたのはボストンでだ
- b. メルを飼っているのは齋藤さんだ

これらの要素のうち、どの文法範疇が過剰生成されるのか。これについての分析には、1990年までには大きく2つの仮説が提案されている。過剰生成される「の」が、(4)の名詞(N)であるとする説(永野1960)と、(5)の属格であるとする説(Clancy 1985; 横山1990; 伊藤1998等)である。一方、Murasugi(1991)では、中期から後期の年齢の被験者を対象とした実証研究と生成文法理論による分析に基づき、(2)-(3)のように過剰生成された「の」は(6)の補文標識であるとする仮説を提示している。

本稿は、(1)-(3)で示す過剰生成された「の」の文法範疇が何であるかを解明する。異なる要素の「の」- 属格、代名詞、補文標識- は、いつ、どのように獲得され、過剰生成は、いつ、どのようにおきるのかについて、日本語を母語とする幼児1名(「あつくん」(1997年6月生まれ))を対象とする六年間の縦断的観察・実験研究に基づき、異なる範疇の「の」の獲得時期と過剰生成の「の」のあらわれる時期との関連について、実証的研究結果を報告する。そして、横山(1990)、村杉(1998)で示唆されるように、「の」の過剰生成の時期が2期存在し、さらに、第1期目に「過剰生成」されるのは名詞(N)としての「の」であり、第2期目のそれは、(名詞句内で修飾節と主要部とを繋ぐ)補文標識(C)としての「の」であるとする分析を示す。

2. 「の」の獲得順序と第1期「の」過剰生成

本節では、第1期の「の」の過剰生成がはじまる時期について、永野(1960)の観察結果を実証的に裏付ける。永野(1960)の被験者女兒では、2;1の頃に、「きいろいの はな」(永野, p. 411)などの過剰生成の「の」が観察された。この時期は、「おおきいの」、「ちっちゃいの」(p. 410)などの準体助詞の「の」(本稿で述べるところの名詞(N)としての「の」)が観察されていた時期と重なる。ここで重要なのは、過剰生成の時期に、格助詞の「の」が観察されていないことである。「あむなの セーター」、「パパの ぶとん」(p. 412)などの格助詞の「の」が観察されるようになったのは、その1ヶ月後の2;2であると永野(1960)は報告している。

本研究の被験者の「の」の獲得の第一段階は、所有の意味をもつ「の」であった。2;3で、Cazden(1968)の述べる「名詞句の独立属格形」の「の」(e.g., あつくんの)は観察されるが、「名詞句の属格形+名詞」の構造において項に付与される属格「の」はあらわれない(e.g., あつくんのおふとん)。(φは、大人の文法で義務的に挿入される位置に、属格がないことを意味する。)所有の意味での「NPの」と「NPφN」との共存の時期が、2;3-2;5の3ヶ月間続いた。

本被験者の「の」の獲得の第二段階は、名詞(N)の「の」である。所有の意味をもつ「名詞句の独立属格形」の「の」は、2;3の初めから観察され始めたが、2;3の終わりに、形容詞に修飾される名詞(N)の「の」があらわれた(e.g., あかい、の、あった)。被験者が初めて所有物以外

の意味を表す「の」を含む文を発話したのは、所有の「の」が現れてから3週間後のことであった。

上記の第一段階、第二段階を経た後、永野(1960)の観察結果と同様、本研究でも「の」の過剰生成が観察された。この第1期の過剰生成は、名詞(N)の「の」(形容詞+名詞的「の」)を含む発話が観察されてから約1週間後の2:4にあらわれた。

- (7) a. あっくん、ちいちゃい、*の、こんこんこんこん (2:4)
(=あっくんの小さい(やつ)、コンコンするやつ)
b. まま、おおきい、*の、ぼおち (2:4) (=ママは、大きいのを、帽子をかぶっていた)

(7a-b)につけられた括弧内の大人の文は、これらの発話が観察されたときに記録されたものである。「ちいちゃい、*の」、「おおきい、*の」の後に少しポーズがあったため、観察者は上記のような対応文を記録している。(7a)は、大人が使う本物の大きい金槌ではなく、自分のおもちやの小さい金槌が見つからない、という意味で発話された。(「金槌」は、「こんこんこんこん」として被験者の語彙にあらわれる。) (7b)は、棚に並べて置かれた被験者の小さな帽子と母親の大きな帽子を見て、帽子をかぶって散歩したことを振り返りながら発話された。

(7)の第1期「の」過剰生成は、修飾句が、(時制が現在形である)形容詞の場合のみに見られ、かつ、語彙的に限られた形容詞に起こることが特徴である。(横山(1990)を参照のこと。) 2:4から2:5の間に観察された「過剰生成」の「の」を含む発話で、問題となる形容詞は「おおきい」と「ちいちゃい」のみで、「赤い」や「甘い」などの形容詞は限定的形容詞の形では観察されなかった。2:6において、「甘い」「赤い」「違う」などが限定的形容詞として増えるものの、その時点でも形容詞の数は限られ、活用についても、一つの語彙(形容詞)について一つの形式(現在形)のみが用いられた。(7)のような「過剰生成」がみられる以前に、2:0の時点で、限定的形容詞を含む発話は「(一見、大人の用法と同じ)正しい形」としてあらわれた(e.g., おっきい、とあっく(=大きいトラック))。2:0から2:3には、「正用」のみが観察されたのに、その後、2:4に、(7)の「過剰生成」がみられたのである。

さらに、(7)の「過剰生成」の時期の重要な特徴として、問題の「の」が(初出された2:4から2:7のはじめまで一貫して)随意的に「過剰生成」された。すなわち、この段階で本被験者においては、限定形容詞と名詞との間に、常に「の」を挿入するのではなく、「形容詞+名詞」の形をもつ「正しい」発話(e.g., あっくん、ちいちゃい、こおき、みた(=あっくんは小さい飛行機を見た))も、「の」を含む「誤った」発話(e.g., ちいちゃい、*の、ちゅつぽちゅつぽ、ない(=小さいのがない、汽車がない))も、同時期に観察されたのである。

そして、この第1期「の」過剰生成がはじまった段階では、永野(1960)の観察と同様、(8)のように、[NP+属格+N]という名詞句内では、属格がいっさいあらわれなかった。

- (8) a. あっくん、あっくん φ、てて (2:4) (=あっくんはあっくんの腕を握る)
b. まま、あっくん、ばあちゃん φ、おうち、ごあん、ぱく (2:4)
(=ママ、あっくんはおばあちゃんのお部屋でご飯をパクッと食べたよ)
c. おなか φ、うえ、ねんね (= (トトロの) お腹の上で寝ていた) (2:5)

[NP+属格+
によって引き
繰り返させて

(9) M:
C:

属格の「の」

以上のように

の]]構造をも

得順序は、永

のN]の構造

2カ月も前に

これらの観

る。横山(1990)

誤用(過剰生

出しているど

論は当てはま

横山(1990)

次に、過剰生

成の「の」と

られている点

例がある場合

している形容

R児では(中

なわち、永野

山(1990)の観

えるのが妥当

第1期の名詞

る。

(10) a. 「

b. 名

c. 「

d. 形

岩立(1997)の

しか使えず、時

がみられる時期

[NP+属格+N] の構造のもとで「の」があらわれないことは、(9)のように、repetition task によって引き出された発話からも裏付けられる。実験者 (M) が、属格を含む名詞句を被験者に繰り返させても、被験者 (C) は「の」を脱落して産出した。

(9) M: ABCの中のSだね

C: ええびいちい φ、なか φ、えちゆ (2;4)

属格の「の」が挿入されるのは、2;4に過剰生成が始まってから2ヶ月後の2;6以降である。

以上のように、第1期の「の」過剰生成は、Cazden(1968)の述べる「名詞句の独立属格形」([NPの]) 構造をもつ所有の意味の「の」と名詞(N)の「の」が獲得された直後に観察された。この獲得順序は、永野(1960)において報告された獲得順序と一致する。つまり、永野(1960)では、[NPのN] の構造のもとで属格の「の」があらわれるようになる1ヶ月前に、そして、本研究では、2カ月前に、第1期の過剰生成の「の」が観察されている。

これらの観察結果は、過剰生成の「の」は格助詞であるとする仮説に対する実証的な反例となる。横山(1990)は、自身の2名の対象児、ならびに、野地(1977)などの対象児らの多くにおいて、誤用(過剰生成の「の」の使用)の初出よりも早い段階で、「名詞+格助詞ノ+名詞」の形が頻出していると報告しているが、少なくとも、永野(1960)の対象児や本研究の被験者には、この結論は当てはまらない。

横山(1990)の観察には、むしろ、本研究と同様に、永野(1960)が示した「名詞(N)の「の」の次に、過剰生成の「の」が出現する」という順序を裏付けるものがある。横山(1990)は、過剰生成の「の」と共起する形容詞の種類に着目し、この時期の幼児の獲得している形容詞の種類が限られている点を指摘する。しかも、その限られた種類の形容詞が、名詞(N)の「の」と共起する例がある場合に、「過剰生成」の「の」を伴って出現する例が多い。その上で「誤用のノと結合している形容詞が「形容詞+準体助詞ノ」のかたちで現れている割合が、K児では(中略)65.1%、R児では(中略)75.0%とかなり高い割合を占めていた」という指摘をしている(1990:7)。すなわち、永野(1960)で観察された事実が、本研究の被験者からも、また、格助詞説を支持する横山(1990)の観察事実からも裏付けられている。したがって、問題の「の」は名詞(N)であると考えるのが妥当であると思われる。

第1期の名詞(N)としての「の」過剰生成が観察される時期の特徴は、(10)のように纏められる。

- (10) a. 「名詞句の独立属格形」([NPの]) 構造での所有の意味の「の」は獲得されている。
b. 名詞(N)の「の」も獲得されている。
c. [NPのN] の形で属格の「の」があらわれない。
d. 形容詞は1つの活用形のみしか使えない。

岩立(1997)の研究にみるように、幼児は、形容詞や動詞を使い始める時期には1つの活用形のみしか使えず、時制や態に応じて活用を変えることはできない時期がある。第1期「の」過剰生成がみられる時期は、未だ顕在的に多様な時制や態が少なくとも形容詞の活用として観察されない

時期であった。そして、同時期に「が」格などの格はあらわれなかった。

また、本研究では、この段階の顕著な発話特徴として、要素を繰り返す発話が多用されることが観察されている。(11)がその一例である。

- (11) a. あっくん、こえ、ちゆ、こえ (2:5) (=あっくんはこれをしたい、これを)
b. まま、しゅっぽっぽ、かいて、しゅっぽっぽ (2:5)
(=ママ、汽車の絵を描いて、汽車の)

この発話特徴は、永野(1960)の観察した過剰生成の記録にも共通してみられるものである。

以上に示したように、第1期に「過剰生成」される「の」は名詞(N)の「の」である。では、第1期の名詞(N)の「の」の「過剰生成」とは、幼児の言語獲得におけるどのような特徴を意味するのか。Dan Slobin (p.c.)はこの現象について「フレーム化」の可能性を指摘する。Clark (1993)は、子供の項構造獲得の初期段階において、項構造をパターン化し、頻度が高く汎用範囲が広い動詞を頻繁に使用する傾向があると指摘する。特に、入力情報内においても頻度の高い light verb (do, go, make, give)などは、他の動詞よりも早く獲得され、幼児の発話において、未獲得の動詞の代用として、動詞句主要部の位置にあらわれることが多いと指摘する。

- (12) a. You .. do .. doing that. (as adults build blocks into a tower)
b. Uh oh, I did. (as he turned off the tape-recorder by pushing a knob)
c. Make name! (telling an adult to write the child's name) (Clark 1993: 29)

Slobin (p.c.)は、同様のことが、日本語名詞句獲得の初期段階にも、みられるのではないかと指摘する。幼児は、名詞句の典型的なフレームとして、その主要部に他の名詞の代用形として「の」を置き、いったん修飾句を含む名詞句を形成する。そして、その直後により具体的な意味をもつ名詞句(語彙)を置くことによって、情報を詳細化させる。その結果、一見、「の」が過剰生成されたように見えるというものである。

Slobinの示唆は、フレーム化に加えて、一種の right dislocation を仮定するものであるが、関連する Input が存在する可能性は高い。Clancy(1985)は、Hinds (1976)、Kuno (1978)等を引用しつつ、日本語の大人の発話の語順が極めて自由であり、文末により詳細な情報を担う構成素が“postpose”されて置かれる傾向があると述べる。また、齋藤衛(p.c.)は、母親語や一般の入力に、right dislocationのような例が多いことを指摘する。母親が子供に話す Input には、「はやく pro 着なさい、服(を)」のような例が多い。子供のフレーム化のための肯定的証拠は、大人の発話に実際に存在することになる。

もし、第1期「の」過剰生成が上記のメカニズムによって起きているとすれば、この現象は、もはや過剰生成の問題ではない。それはむしろ、名詞句の典型的な構造を、頻度汎用の高い名詞(N)「の」を主要部としてフレーム化し、より具体的な情報をもつ名詞を後続させる「ダブリング」現象であることになる。このとき、子供がもつ構造は $[_p \text{ Adjective } n] N$ のようなものであると考えることができる。それは、修飾句を含む名詞句の産出獲得過程と語彙獲得の途上にみられる特徴であるといえる。

3. 第2期「

本研究では、
の過剰生成が観

本被験者にお
おちゃ」「わん

「名詞句の属格
はない。所有に

属格の「の」が
は、(13)に示す

- (13) a. あ
(=
b. ま
(=

この属格挿入
として、(大人

の時期に、(14)
過剰生成が、引

- (14) a. も
(=
b. あ
c. あ

前節で取り上げ
とに限られてい

まだこの時期、
そして、2:6

を修飾句として
関係節には、「

- (15) a. なん
b. ばば

この時期は、時
「買った」と括

らわれる。また
なかった。一見

3. 第2期「の」過剰生成

本研究では、第1期の「の」「過剰生成」(ダブリング)が終焉した後に、別種と思われる「の」の過剰生成が観察された。本節では第2期の「の」過剰生成の出現について報告する。

本被験者において、属格「の」が観察され始めたのは、2;6であった(e.g., 「あっくん、の、おちゃ」「わんわん、の、わんわん、の、とけい」(=クマの絵のついた時計))。興味深いことに、「名詞句の属格形+名詞」の形において、属格の「の」が(正しく)義務的に挿入されるわけではない。所有に関する名詞句については、2;6の段階で大人の文法と同様の属格挿入がみられ、属格の「の」が常に脱落せずあらわれた。ところが、同被験者においては、それ以外の属格の「の」は、(13)に示すように、随意的にあらわれた。

- (13) a. あっくん、ぱぱ、の、ちゃっちゃっちゃちゃっ、みたい (2;6)
(=あっくんは、パパがサッサッと種を蒔くところを見たい)
b. まま、こうやって、あっくん φ、まね、こうやって (2;6)
(=ママ、こうやって、あっくんの真似して、こうやって)

この属格挿入の過小生成は、長期に渡って(2;6-2;9)観察された。そして、重要な観察事実として、(大人の文法では、付与されるべき)属格の「の」が(随意的に)過小生成される2;6の時期に、(14)のような(大人の文法では、「の」が入ってはならない位置に)第1期の「の」過剰生成が、引き続き見られるのである。

- (14) a. もっと、ちいちゃい、*の、しゅっぱぽぽ、あった (2;6)
(=もっと小さな汽車があったはず)
b. あかい、*の、ちよっきんちよっきん、ない (2;6) (=赤いハサミがない)
c. あっくん、あまい、*の、おしえんべえ (2;6) (=あっくんは甘い煎餅が欲しい)

前節で取り上げた2;4-2;5の「過剰生成」では、形容詞はすべて「おおきい」と「ちいちゃい」とに限られていたが、2;6には、(14)のように「赤い」や「甘い」などもあらわれる。しかし、まだこの時期、時制や態に応じて形容詞を活用させることはできなかった。

そして、2;6後半、第1期の「の」過剰生成が減少しつつある時期、(15)のような「買った」を修飾句としてもつ(擬似)関係節を含む発話も観察されているが、奇妙なことに、その(擬似)関係節には、「の」がまったく過剰生成されなかった。

- (15) a. なんなんなあ、かった、ぱん、おおちい (2;6) (=お出かけして買ったパンが欲しい)
b. ぱぱ、かった、だんご、おおちい (2;6) (=パパが買ってくる団子が欲しい)

この時期は、時制の活用が語彙としてあらわれていない段階であると判断される。(15b)の動詞「買った」と括弧内に示す意味との齟齬にも見られるように、動詞や形容詞は1つの活用のみあらわれる。また、複合名詞句に見える構造であられる動詞は「買った」以外には全く観察されなかった。一見複合名詞句に見える(15)は、実は時制の活用が語彙化してあらわれない修飾句を

含む擬似関係節であると思われる。

注意すべき点は、(15)のような構文では、まったく過剰生成がみられないにも関わらず、同時期に、形容詞の例では、随意的に第1期「の」過剰生成が続いていることである。2:6後半でも、大人の文法と同じ「形容詞+名詞」という型の発話と、「過剰生成」の「の」を含む「形容詞+名詞」という型の発話とが、同時期に観察されている。そして2:6後半から2:7のはじめには、第1期の「の」の「過剰生成」(ダブリング)が減り、(15)のような「の」のない発話のみが観察されるようになる。観察上、「の」の「過剰生成」は終わったかのように思われた。

ところが、(15)が観察された後、しばらくたって、同被験者は「の」の過剰生成を再びはじめたのである。2:6の時点では、(15)のように、一つの動詞(「買った」)のみについて、「の」の過剰生成がない(擬似)関係節を産出していた被験者が、一転して、2:7以降は、(16)のように「買った」という動詞のみならず、それ以外の(時制をもった)修飾句と名詞との間に、生産的に、「誤った」「の」を過剰生成するようになったのである。

- (16) a. パパ、かった、*の、おちえんべい、おおちい (2:7)
(=パパが買ってきた煎餅がおいしい)
b. ペンギんちゃん、ちゅいてゆ、*の、かばん (2:9) (=ペンギんの絵がついている鞆)
c. いま、ぱぱ、が、いえた、*の、おととと、どこ (2:10)
(=今、パパが入れた観賞魚は、どこにいるの?)

実は、この時期は、所有以外の属格挿入が過小生成される時期と重なる。すなわち、(在るべき構造下で)属格「の」が過小生成される一方で、時制をもった修飾句に(在ってはならない構造下で)「の」が過剰生成される。Murasugi (1991)においても、関係節や形容詞などを修飾句とする名詞句において、「の」が「誤って」過剰生成されるのと同時期に、[PP+属格+N] (e.g., 東京からの電車)の構造のもとで、「の」が過小生成される事実を報告している。

では、再び過剰生成が観察され始めた2:7は、どのような文法獲得段階として考えられるのか。まず第一に、この時期の被験者の主要な文法特徴として、文において「が」格を示すようになったことが挙げられる。厳密に言えば、2:6の終盤から、「こえ、が」(=これが)、「ここ、が」、「あつくん、が」など、母親の質問に答える形で「が」の産出が始まったが、「ぷうしゃん、が、みたい」(=プーさんのビデオが見たい)、「あつくん、が、ちゃちゃちゃちゃ、ちゅ」(=あつくんが、調味料を入れる)など、自発的な発話として「が」格が産出できるようになったのは、2:6末に観察された一例以外では、2:7に入ってからである。

第二に、「が」の獲得と連動するように、2:7には、形容詞において、現在形のみならず、過去形が一斉に産出されはじめた (e.g., 「まま、こえ、あちゅかった」)。また、この時期には、多くの動詞に時制や態の活用が多様に見られた。動詞の過去形も生産的にあらわれた。「作る」という動詞を例にとってみよう。2:6から2:7初めに、(17)のような発話が観察された。

- (17) a. あつくん、じんごう、いま、ちゅくゆ (2:6) (=あつくんは信号を今から作る)
b. ぱぱ、こえ、ちゅくゆ (=パパが、これを作った) (2:7)

「作る」の場合は、初出の形は現在形であるが、(17b)のように過去に作った物について述べていることが明らかな状況でも、現在形が使われている。この時点では、「作った」という過去形は単独でも観察されることがない。その後、2;7の中盤から後半、「作る」は、活用をはじめ、「ちゅくって、ない」(=作ってない)(2;7)の「て形」や(18)のような過去形が観察されるようになったのである。

- (18) a. まま、おおきい、の、ちゅくった(2;7) (=ママは、大きいのを作った)
b. くちゅ、あいてえ、おんも、とことこ、やって、ちゅくった(2;7)
(=靴を履いて、外に出て歩いていった空き地で、雪だるまを作った)

以上、2;7中盤、本被験者において、「が」格と時制が顕在化される時期に、いったん終息を思わせた過剰生成が、再びあらわれた観察結果を報告した。この時期の「の」の過剰生成は、複合名詞句内の過剰生成、すなわち、第2期の「の」の過剰生成と考えられ、第1期の「の」の過剰生成とは区別されるべきものである。この結論が正しければ、本研究で観察された、「が」格付与や時制に關与する) INFLの投射が獲得された時期に「の」が過剰生成される事実は、過剰生成の「の」が補文標識(Complementizer)であるとするMurasugi(1991)の観察結果と一致する。(詳細は、Murasugi(1991)を参照されたい。)

Murasugi(1991)の補文標識説に対する批判として、伊藤(1993: 121)は、対象児Sでは、過剰生成の「の」と格助詞の「の」を2歳2ヶ月2週で初めて観察し、一方、代名詞の「の」は2歳3ヶ月1週で観察したと報告しており、格助詞説を提唱している。しかしながら、本研究及び永野(1960)で観察された結果は、伊藤(1993)の観察結果と全く矛盾する。永野(1960)の対象児、及び40年の時を隔てた本被験者の両方の縦断的研究において、属格挿入規則が獲得されたと考えられる時期は、名詞(N)の「の」の獲得より遅いことは明確である。

さらに、格助詞説は「の」の獲得順序以外からも反証される。すでに、Murasugi(1991)で言及されているように、韓国語の大人の文法で、属格はuy、そして、代名詞と補文標識はka (kes)としてあらわれるが、韓国語を母語とする幼児が、言語獲得の段階で、kaを過剰生成するというKim(1987)の報告がある。そして、同様に、富山方言では、属格は「の」(知子の本)、そして、代名詞や補文標識は「が」(赤いが、ロブスター食べたがはボストンでだ)であられるが、富山方言話者の幼児が「が」を過剰生成することを報告している。

- (19) a. あかい*が帽子
b. アンパンマンついとる *が コップ (2;11) (Murasugi 1991: 178)

さらに、複合名詞句において必要のない「の」が過剰生成される時期に、一方で、属格の「の」が挿入されるべき位置で「の」の過剰生成が観察される。これらの事実から、第2期に過剰生成される要素は属格であるとは考えにくい。

では、なぜ、子供が補文標識を過剰生成し、なにをきっかけに retreat するのか。習得可能性の問題について、補文標識仮説を提唱するMurasugi(1991)は、原理とパラメータ理論に基づいて説明を試みている。日本語はIP(TP)関係節構造であるが、子供が関係節構造のパラメータ一値

として CP 構造を仮定し、分裂文で C として語彙化されている「の」（富山方言では「が」）を、関係節構造で主要部の C の位置にあらわしたのが、第 2 期の過剰生成の「の」であると分析している。また、CP 関係節構造を仮定していた子供も、C が空範疇としてあらわれる pure complex NP を Intake した段階で、空範疇に関する普遍原理 (Principle P) を基に、日本語の複合名詞句は CP 構造ではなく、IP (TP) 構造をもつことを獲得するので、第 2 期の過剰生成から retreat すると分析される。(詳細は、Murasugi (1991) を参照されたい。) 関係節構造のパラメータ値設定が遅くなる理由としては、それが degree 1 以上の「埋め込みを含む」構造であることと、値変更の鍵となる pure complex NP が入力情報内で頻度としても稀であることが考えられる。

以上のように、第 2 期の「の」過剰生成に関しては、Murasugi (1991) の補文標識仮説が、実証的・理論的にも裏付けられる。一方、第 2 期「の」過剰生成が、補文標識ではなく、属格であるとすれば、言語獲得の一過程として、日本語のような属格の特性をもつ言語において、属格の格付与がなぜ過剰に適用され、いかなる肯定的情報と原理をきっかけとして、そこから retreat して大人の文法に至るのか、といった、言語習得可能性に関する理論的問題が残される。

4. 結論

本研究が従来の研究に対してもつ意義は、第一に、「の」の過剰生成（に見える現象）には 2 種類あるとする仮説を提案する点にある。横山 (1990)、村杉 (1998) など、「の」過剰生成には 2 期あるとする可能性は既に指摘されているが、本稿は、その仮説について、実証的な裏付けを与えるものである。Murasugi (1991) の過剰生成の「の」は補文標識であるとする分析への批判のひとつとして、過剰生成を行なう幼児の使用する形容詞に時制がみられない、という実証的報告がある (伊藤 1993)。これに対して、本研究は、この批判が正しいものではないことを示している。2;7 以降に見られた過剰生成は、時制が獲得されている時期のものである。

一方で、その観察は、本研究において観察された第 1 期の過剰生成の特徴と一致するように思われる。本研究においても、第 1 期の過剰生成の時期には、時制が獲得されていないと考える。その意味で、Murasugi (1991) への諸批判は、第 1 期の過剰生成に関する観察として捉え直される可能性がある。もし、この仮説が正しければ、従来の「の」の過剰生成に関する紛糾の一部は、異なる文法範疇が同一の音声表示（「の」）をもって現れるが故に、本来区別されて考えられるべき統語現象が、混同して議論されたことに起因していると言えよう。

第二に、ここで観察された 2 種の「の」のあらわれる過程には共通点がある。第 1 期 (7) においても、第 2 期 (16) においても、問題の「の」が見られる前に、(一見) 大人と同じ形式をもった名詞句が観察されている。そして、いずれの場合も、過剰生成前の「(一見) 大人と同じ形式」は、語彙的に限られるという特徴をもつ。第 1 期においては、「おおきい」「ちいちゃい」などの現在形形容詞に限られ、第 2 期においては、「買った」という動詞のみに「(一見) 大人と同じ形式」がみられる。U 字形のはじまりと終わりは同質ではないのである。

第三に、「の」の統語的過剰生成と呼べる現象は、第 2 期の「の」過剰生成のみであり、第 1 期のそれは統語的過剰生成ではない。第 1 期の名詞 (N) としての「の」の「過剰生成」は、子供が統語範疇を獲得する途上でみせるフレーム化に関する現象であり、幼児が形成する「の」を主要部とする名詞句は、大人のそれと違いがない。日本語を母語とする幼児が、大人の文法とは異なるパラメータ値を試行して過剰生成する「の」は、第 2 期の「の」のみであり、それは、(名

詞句内で修飾

本研究は、
本稿を纏める
く感謝の意を
回 Asian GL
Eisenbeiss か
また、本論を
省科学研究費
へ IA (特別研

伊藤友彦 1993
—— 1998 「
部門 49:
岩立志津夫 199
修館書店
岩淵悦太郎・波
日本放送
大久保愛 1967
永野賢 1960 「
古希記念
野地潤家 1977
村杉恵子 1998
横山正幸 1990
Gazden, Courtr
Clancy, Patri
Study o
Clark, Eve V.
Hinds, John. 1
1, 113-
Kim, Young-Jo
spontar
Kuno, Susumu.
typolog
Murasugi, Kei
acquis
Murasugi, Kei
Japanes
Hankool

詞句内で修飾節と主要部とを繋ぐ) 補文標識である。

謝辞

本研究は、執筆者の一人である橋本知子の実息「あっくん」を被験者とした実証研究である。本稿を纏めるにあたり、長年にわたる縦断研究を支え続けてくれた「あっくん」とその家族に深く感謝の意を表す。本稿の一部は Max Planck Institute of Psycholinguistics (2001), 第4回 Asian GLOW (Seoul, 2003) などで発表し、出席者から示唆を得た。特に Dan Slobin, Sonya Eisenbeiss から、初期の「の」の獲得に関する問題を解決する上で大変重要なコメントを得た。また、本論を構築する過程で斎藤衛氏から多くの示唆を得た。心より感謝する。本研究は、文部省科学研究費補助金(基盤研究(B)および(C))によって援助を受けている。また、南山大学パツヘIA(特別研究助成)からも援助を受けている。ここに記して感謝する。

参考文献

- 伊藤友彦 1993 「幼児における「ノ」の過剰生成」 *Kansai Linguistic Society* 13: 118-26.
——— 1998 「過剰生成される「ノ」の統語カテゴリ—— 幼児一例の縦断研究——」『東京学芸大学紀要』1 部門 49: 143-9.
岩立志津夫 1997 「文法の獲得(1)」小林春美・佐々木正人(編)『子どもたちの言語獲得』:112-30. 大修館書店
岩淵悦太郎・波多野完治・内藤寿七郎・切替一郎・時実利彦 1968 『ことばの誕生—うぶ声から5歳まで』 日本放送出版協会
大久保愛 1967 『幼児言語の発達』東京堂出版
永野賢 1960 「幼児の言語発達—とくに助詞「の」の習得過程について—」『関西大学国文学会: 島田教授古希記念国文学論集』: 405-18.
野地潤家 1977 『幼児期の言語生活の実態 I』文化評論出版
村杉恵子 1998 「言語(獲得)理論と方言研究」『アカデミア』文学・語学編 65: 227-59.
横山正幸 1990 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1(1): 2-9.
Cazden, Courtney. 1968. The acquisition of noun and verb inflections. *Child Development* 39:433-38.
Clancy, Patricia M. 1985. "The acquisition of Japanese." D. I. Slobin (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, vol. 1, 373-524. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
Clark, Eve V. 1994. *The Lexicon in Acquisition*. Cambridge: Cambridge.
Hinds, John. 1976. "Postposing in Japanese." *Eoneo* (The Journal of the Linguistic Society of Korea) 1, 113-123.
Kim, Young-Joo. 1987. *The acquisition of relative clauses in English and Korean: Development in spontaneous production*. Ph.D. dissertation, Harvard University.
Kuno, Susumu. 1978. Japanese: A characteristic OV language. In: W. P. Lehmann (ed.) *Syntactic typology: Studies in the phenomenology of language*, Austin: University of Texas Press.
Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto. 2003. "Two Different Types of Overgeneration of 'no' in Japanese Noun Phrases." Hang-Jin Yoon. (ed.) *Proceedings of the 4th Glow in Asia 2003*. 327-350. Hankook. Seoul. Korea.

The Overgeneration of "no" in the Acquisition of Noun Phrases

Keiko Murasugi Tomoko Hashimoto
Nanzan University

It has been widely known that Japanese-speaking children overgenerate *no* in prenominal sentential modifiers in the grammar acquisition process. This paper reports, based on our six-year-longitudinal-observational study, that this overgeneration occurs in two distinct stages: the first takes place before, and the second is observed after, the genitive Case marker and the complementizer are acquired.

In the acquisition studies, three hypotheses have been proposed regarding the syntactic status of the overgenerated *no*: *no* as a noun (Nagano 1960), *no* as the genitive Case marker (Yokoyama 1990, Ito 1993) and *no* as a complementizer (Murasugi 1991). We suggest that the overgenerated *no* is a pronoun in the first stage and a complementizer in the second, thereby providing supporting evidence for both the noun hypothesis and the complementizer hypothesis.

We further conjecture that the first overgeneration takes place when children "overgeneralize" the usage of the pronoun *no* and place it after any prenominal modifier. As for the second overgeneration, we show on empirical grounds that the *no* in question cannot be a pronoun or the genitive Case marker and hence, maintain Murasugi's (1991) analysis. Prenominal sentential modifiers in adult Japanese and Korean are of the category TP (IP) (instead of CP) but children initially hypothesize that they are CPs. Consequently, some children produce an overt complementizer as the head of the CP (based on the knowledge that C is *no* for example in cleft sentences.) Those children retreat from the overgeneration on the basis of positive evidence and their knowledge of the universal syntactic principles.

The status of the *no* in question has been controversial over the years because conflicting empirical evidence has been presented. This paper attempts to sort out the relevant acquisition data regarding the different types of *no*, based on our longitudinal study, and try to solve the mysteries associated with the phenomenon.

Subjectivity

Prashant Par

prashant

1. Introduction

In the field of J functions of J passive—has lo (affective passi (hatameiwakunc passive (rigai r passive (higai u passive (jyuei jy Further, it has Masuoka (1991: they depict pers "objective" desc

Kuno & Ka describe an even that of the under term "camera an person who par passives are "sul speaker/narrator.

From the fo notion of subjec passive in Japan of subjectivity cross-linguistic v

In order to cross-linguistic p and Marathi (an

2. Methodology

A parallel corpu

Subjectivity and the passive—A cross-linguistic parallel corpora account*

Prashant Pardeshi (Kobe University), Qing-Mei Li and Kaoru Horie (Tohoku University)

prashantpardeshi@gmail.com, cjdao2000@gmail.com, khorie@mail.tains.tohoku.ac.jp

1. Introduction

In the field of Japanese linguistics, various scholars have proposed “affectivity” as one of the functions of Japanese passive. A bipartite semantic distinction— affective passive vs. neutral passive—has long been proposed by various scholars such as Matsushita (1930: *rigai no hidoo* (affective passive) vs. *tanjyun hidoo* (simple passive)), Mikami (1953: adversative passive (*hatameiwakuna ukemi*) vs. proper passive (*matomona ukemi*)), Sakuma (1966: affective passive (*rigai no hidou*) vs. original passive (*honrai no ukemi*)), Kuno (1983: adversative passive (*higai ukemibun*) vs. neutral passive (*chuuritsu ukemibun*)), Masuoka (1991: affective passive (*kyuei jjudoubun*) vs. agent demotion passive (*koukaku jjudoubun*)), just to name a few. Further, it has also been proposed that the affective passives are “subjective” expressions. Masuoka (1991: 109-110), for example, argues that affective passives are “subjective” in that they depict personal experience of the subject. Agent demotion passives, on the other hand, are “objective” description of an event.

Kuno & Kaburaki (1977: 627) claim that: “Passivization is used when the speaker wants to describe an event with the camera placed closer to the referent of the underlying object than to that of the underlying subject”. They introduce a term “empathy” to replace the non-technical term “camera angle” and define it as the speaker’s identification, with varying degrees, with a person who participates in the event that he describes in a sentence. Such empathy-loaded passives are “subjective” by definition in that they depict the event from the perspective of the speaker/narrator.

From the foregoing review it is clear that scholars have envisaged a correlation between the notion of subjectivity (which is closely related to notions like affectivity, empathy) and the passive in Japanese. The fundamental question then is: Does this correlation between the notion of subjectivity and the passive hold cross-linguistically? The goal of this paper is to test cross-linguistic validity of this correlation.

In order to empirically test the validity of the aforementioned correlation we undertook a cross-linguistic parallel corpora analysis of the passive in Japanese, Korean, Chinese, English and Marathi (an Indo-Aryan language spoken in Maharashtra State, India).

2. Methodology

A parallel corpus makes the cross-linguistic comparison fairly straightforward, as the text

content is constant. Our parallel corpora comprises of a Japanese novel entitled "MADOGIWA NO TOTTOCHAN" by Tetsuko Kuroyanagi and its translated versions in Chinese, Korean, English and Marathi. The story is a first person narration depicting the childhood of the narrator and was chosen on purpose to assess the effect of subjectivity in the use of passive expression.

Past analyses described in the previous section predict that whenever the narrator is involved in the event as a patient, the event should be described from the perspective of the narrator using a passive construction. Further, while describing an event involving third person entities, the narrator will identify himself with one of the participants and depict the event in question from the perspective of the empathized participant. If the empathized participant happens to be at the receiving end of the state of affairs being described, passive construction should be recruited. In what follows we will investigate if these predictions are borne out. Before embarking on the analysis, however, some methodological preliminaries are in order.

As a standard practice in typological cross-linguistic study we used semantic criteria for identifying passive construction since the formal properties of the construction vary from one language to another. Concretely speaking, we adopted the passive prototype (e.g. agent defocusing) advocated in Shibatani (1985) to identify passive constructions in the source (Japanese) version and looked for how their counterparts in the target languages at hand are rendered. The passive prototype was also used to adjudge if the corresponding expression in the target language is passive or not. The correspondence between passive expressions in Japanese and their counterparts in other languages is shown in Table 1 below.

Table 1: Text frequency of the passive in TOTTOCHAN

Japanese	Korean	English	Chinese	Marathi
80	38/68	37/75	31/75	7/66

The table reads as follows. The Japanese text has 80 tokens of passive in total. In Korean, corresponding to these 80 tokens in Japanese, 68 were translated while the remaining tokens were what we call "free translations" in which the translator has taken complete liberty in going away from the original text and rendered the expression in a complete different way. Out of the 68 translated tokens in Korean, 38 were rendered as passive while the rest were translated as active (read the figures in the table in a similar way).

3. Analysis

As shown in Table 1 the frequency of passives drastically differs from one language to another. The remarkable variation in the token frequency of passives across languages raises the following fundamental issues:

- (i) Why does frequency of the passives vary so drastically across languages?
- (ii) Is there a correlation between the frequency/use and the function of the passive?

(iii) Does the fu
(iv) If yes, where
All these issues are no
carried out detailed a
analysis we adopted t
by Masuoka (1991).

Masuoka (1991)
passives), (ii) *koukaku*
(attribute description
defocusing" passives
categories, patient pro
bound event while at
typical examples of the
translations are ours).

(A) Patient profilin

1st person profil

Watashiwa sono

'I was scolded b

3rd person profil

Tarou wa densh

'Taro had his fo

3rd person profil

Hanako wa kod

'Hanako was ac

(B) Agent defocus

kaitouyoushi ga

'Answer sheets

(C) Attributive pa

Hanako no ie wa

'Hanako's hous

Adopting the ab
tokens in respective l

(iii) Does the function of the passive vary from one language to another?

(iv) If yes, where does the functional variation come from?

All these issues are not discrete but rather interrelated. In order to shed light on these issues we carried out detailed analysis of the passive tokens attested in the parallel corpora. For our analysis we adopted the tripartite functional classification of the passive in Japanese proposed by Masuoka (1991).

Masuoka (1991) classifies passives into three categories: (i) *kyueijyudoubun* (affective passives), (ii) *koukakujiyudoubun* (demotional passives), and (iii) *zokuseijyujitsujyudoubun* (attribute description passives). We refer to them as "patient profiling" passive, "agent defocusing" passives and "attributive" passives respectively. Out of these three functional categories, patient profiling and agent defocusing passives are related to a spatio-temporally bound event while attributive passives pertain to a time-stable state. To get a concrete idea, typical examples of the said categories from Masuoka (1991: 106-107) are given below (English translations are ours).

(A) Patient profiling passive:

1st person profiling: subject directly affected

Watashiwa sono koto de oya ni shikarareta

'I was scolded by my parents for that thing'.

3rd person profiling: subject semi-directly affected

Tarou wa densha no naka de tonari no hito ni ashi wo fumareta

'Taro had his foot stepped on by the person standing next to him in the train'.

3rd person profiling: subject indirectly affected

Hanako wa kodomo ni nakarete, yoku nerarenakatta.

'Hanako was adversely affected by the child's crying and could not sleep'.

(B) Agent defocusing passive

kaitouyoushi ga kaishuu sareta

'Answer sheets were collected'.

(C) Attributive passive:

Hanako no ie wa kousou biru ni kakomarete iru

'Hanako's house is surrounded by skyscrapers'.

Adopting the above-mentioned tripartite functional classification we analyzed the passive tokens in respective languages at hand. The break-up of the passive tokens is shown in Table 2.

Table 2: Functional domain-wise distribution

	Patient profiling	Agent defocusing	Attributive	Total
Japanese	55 (69%)	18 (23%)	7 (9%)	80 (100%)
Korean	23 (61%)	12 (31%)	3 (8%)	38 (100%)
English	24 (65%)	10 (27%)	3 (8%)	37 (100%)
Chinese	25 (81%)	4 (13%)	2 (6%)	31 (100%)
Marathi	4 (57%)	3 (43%)	0 (0%)	7 (100%)

We will discuss each of the three functions in detail below and uncover similarities and differences observed across languages. Let us start with the “patient profiling” passives that turn out to be statistically the most prominent functional domain across languages at hand.

3.1 Patient profiling (PP) passives

As per the “empathy” hierarchy proposed by Kuno & Kaburaki (1977), a passive construction will be recruited when the speaker/narrator or members belonging to his/her in-group are on the receiving end of an action. In order to have a more fine-grained picture, we sub-classified the patient profiling passives into two categories: (i) those involving the narrator and (ii) those not involving a narrator. Further, in order to assess the repercussions of the notion of affectivity, we also looked into whether the patient profiling passives are affective in meaning or not. The results of our analysis are tabulated in Table 3 below.

Table 3: Intra-language functional domain-wise distribution

	Patient profiling						Agent Defocusing	Attributive	Total
	Affective				Non-affective				
	Adversative		Benefactive		Narrator	Non-narrator			
	Narrator	Non-narrator	Narrator	Non-narrator					
Japanese	12 (15%)	16 (20%)	1 (1%)	1 (1%)	13 (16%)	12 (15%)	18 (23%)	7 (9%)	80 (100%)
Korean	6 (16%)	13 (34%)	1 (3%)	1 (3%)	0 (0%)	2 (5%)	12 (31%)	3 (8%)	38 (100%)
English	7 (19%)	10 (27%)	0 (0%)	1 (3%)	1 (3%)	5 (13%)	10 (27%)	3 (8%)	37 (100%)
Chinese	10 (32%)	11 (35%)	0 (0%)	1 (3%)	1 (3%)	2 (6%)	4 (13%)	2 (6%)	31 (100%)
Marathi	1 (14%)	1 (14%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)	1 (14%)	3 (43%)	0 (0%)	7 (100%)

From Table 3 it is clear that the notion of adversity plays an important role in the use of passive across languages. Further it also reveals that the degree of sensitivity to the notion of adversity varies from one language to another. Cross-linguistic variation in terms of sensitivity to the notion of adversity is shown below in Table 4.

Table 4: Adversative passives across languages

Japanese	Chinese	Korean	English	Marathi
28	21	19	17	2

The repercussion languages such as sensitive to the no

- (1) a. あのマサ
- た。[Japa
- b. ceketo
- at least
- ai-lanun
- child-QU
- c. Nàge
- That
- bèi
- PASS
- d. Masao-c
- e. paN
- but

What is more in non-adversative maintain topic c narrator himself/ this non-adversa

Japanese
26

From Table 5 it passives employ the existence of the action is dir some other lang passive involvi (Ryou-chan) tha Korean, Chinese

- (2) a. 良ちゃん
- だった。
- b. “...”la
- ... Q

The repercussion of adversity on the use of passives has long been recognized for East Asian languages such as Japanese, Korean and Chinese. A South Asian language like Marathi is less sensitive to the notion of adversity. Example (1) below is testimony to this fact.

(1) a. あのマサオちゃんが、理由なく、人から悪口を言われている子供だってことは、分かった。 [Japanese]

b. ceketo ku Masaocang-i kkadalkepsi salamtul-hanthey yok-ul meknun
 at least that Masao-NOM no reason people-DAT scoding-ACC eat.ADN
 ai-lanun ken al-ass-ta.
 child-QUO NOML know- PST-DECL [Korean]

c. Nàgè jiào Zhèng nán de háizi, wú yuán wú gù dì
 That call Zhengnan POSS child no reason
 bèi rén cháoxiào
 PASS people laugh at [Chinese]

d. Masao-chan was a little boy whom people spoke ill of for no reason. [English]

e. paN lok maatra nishkaaraN tyacaashi waaIT waagaayce
 but people for no reason with hime bad behave [Marathi]

What is more interesting is the cross-linguistic variation observed in the use of passives in a non-adversative context. Such perspective-sensitive or empathy loaded passives are recruited to maintain topic continuity in discourse organized from the perspective or point of view of the narrator himself/herself or a participant with whom the narrator empathizes. The distribution of this non-adversative variety of perspective-sensitive passives is given below in Table 5.

Table 5: Non-adversative passives across languages

Japanese	English	Chinese	Korean	Marathi
26	6	3	2	1

From Table 5 it is clear that Japanese abounds with such non-adversative perspective-sensitive passives employed to maintain topic continuity in narration. Various scholars have recognized the existence of such passives in Japanese. Shibatani (2003: 278), for example, states that when the action is directed to speaker's sphere, the passive is obligatory in Japanese and possibly in some other languages. Example (2) below from TOTTOCHAN is a case of a non-adversative passive involving a perspective shift from the narrator to another character in the story (Ryou-chan) that the narrator empathizes with. Note that passive is used only in Japanese while Korean, Chinese, English and Marathi use an active construction.

(2) a. 良ちゃんも、もう、ずーっと、「もってきてやる」と、右田君から、言われていたからだった。 [Japanese]

b. "...Janunmal-ul swuepsi tulewa-ss-ki ttaymwun-ita
 ... QUOtalk-ACC so many times listen-PST-cause-DECL [Korean]

- c. Yǒutiánjūn yě gēn Āliáng shuō guo hǎo duō cì
Youtianjun also to Aliang talk had been so many times [Chinese]
- d. Migita had been telling him for ages that he would bring him some. [English]
- e. kaaraN migitaa-ni tyaa-laa kityek yugaanpaasun te deNyaaca
because Migita-ERG he-DAT since a long time that give
kabal kela hota
agree did had [Marathi]

As is clear from Table 5, recruiting a passive to depict the event from the speaker's perspective is conspicuous in the case of Japanese while it is almost irrelevant in the case of Marathi. Other languages at hand lie in between these two poles. It should be noted that this is the area where cross-linguistic variation is conspicuous.

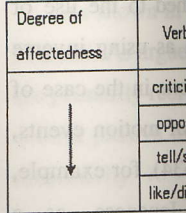
To shed further light on correlation between subjectivity (empathy, adversity) and the use of passives we conducted a questionnaire-based study of action events involving the first person (speaker) as a patient. The results of the survey are tabulated below in Table 6.

Table 6: Correlation between subjectivity (empathy, adversity) and the use of passive

	Jpn.	Viet.	Thai	Khmer	Chinese	Mongolian	Korean	English	Hindi	Marathi	Nepali	Bangla
criticize	○	○	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x
oppose	○	○	○	○	x	x	x	x	x	x	x	x
bully	○	○	○	○	○	x	○	○	x	x	x	x
scold	○	○	○	x	○	○	○	x	x	x	x	x
fool around	○	○	○	○	○	○	x	○	x	x	x	x
laugh at	○	○	○	x	○	x	○	x	x	x	x	x
mistake	○	○	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x
suspect	○	○	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x
ask	○	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x	x
tell/say	○	○	x	○	x	x	x	x	x	x	x	x
see/watch	○	○	○	x	○	○	x	x	x	x	x	x
approach	○	○	○	○	x	x	x	x	x	x	x	x
like/dislike	○	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
step on	○	○	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x
steal	○	○	○	○	○	x	x	x	x	x	x	x
read	○	○	○	○	x	x	x	x	x	x	x	x
rain	○	○	○	○	x	○	x	○	x	x	x	x
come	○	○	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
die	○	○	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

Table 6 reveals that while Japanese uses the passive obligatorily when the speaker is on the receiving end, none of the South Asian language (Hindi, Marathi, Nepali and Bangla) use passives in the same situation. Other languages at hand lie in between these two poles. The findings of our survey endorse the claim made by Li & Thompson (1981) and echoed by Iwasaki (1993: 9) that "adversity" is a primary function of the Chinese passive and show that

the same traits a Chinese, Thai, and the notion of "adversity" in South Asian languages from one language to another and the use of passives and the u



East Asian and South Asian languages unequivocally treat Japanese as a patient. Japanese treats a patient as a verb like *criticize*. perceptible clues to adversity that a verb lacks such clues. and the low end of the scale should be added to the contextual information.

In sum, recruiting a passive is conspicuous in the case of Japanese. Other languages at hand lie in between these two poles. The findings of our survey are shown in Table 6.

Japanese
339

Due to space constraints, only a portion of the total tokens are shown in Table 6. Where does the notion of "adversity" stem from the domain of "subjectivity" of a

the same traits are observed in other East and South-East Asian languages like Japanese, Chinese, Thai, and Vietnamese etc. East Asian and South East Asian languages are sensitive to the notion of "adversity" and tend to take the perspective of the affected entity more readily than South Asian languages for instance. The construal of an adversative situation, however, varies from one language to another. Table 7 below shows subtle interaction between the notion of adversity and the use of passives.

Table 7: Repercussion of the notion of adversity

Degree of affectedness	Verb	Jpn.	Viet.	Thai	Khmer	Chinese	Mongolian	Korean	English	Hindi, Marathi, Nepali, Bangla
↓	criticize	○	○	○	○	○	○	○	×	×
	oppose	○	○	○	○	×	×	×	×	×
	tell/say	○	○	×	○	×	×	×	×	×
	like/dislike	○	×	×	×	×	×	×	×	×

East Asian and South-East Asian languages, which are more sensitive to the notion of adversity, unequivocally treat a verb like *criticize* as conveying adversity while none of them except Japanese treats a psychological predicate like *like/dislike* as conveying adversity. In other words, a verb like *criticize* can be easily construed as adversative probably because it gives more overt perceptible clues than a mental activity or internal state predicates such as *like/dislike*, which lacks such clues. We argue that this variation follows from the difference in the degree of adversity that a verb implies. The verbs *criticize* and *like/dislike* respectively occupy the high and the low end of the adversity cline while *oppose*, and *tell/say* lie mid-way on this cline. It should be added that in addition to the adversity meaning latent in the lexical meaning of a verb contextual information plays a crucial rule in the adversative construal of the situation.

In sum, recruiting passive construction to depict an event from the speaker's perspective is conspicuous in the case of Japanese while it is almost irrelevant in the case of Marathi. Other languages at hand lie in between these two extremes. Similar results were attested in our parallel corpus based contrastive study of KOKORO (a novel by Natsume Souseki) as well. The results are shown in Table 8.

Table 8: Distribution of passive in KOKORO

Japanese	Korean	English	Marathi
339	164	102	42

Due to space constraints we will not go into details, but it should be added that more than a third of the total tokens of the passive attested in Japanese involved the narrator at the receiving end.

Where does the variation come from? We claim that the cross-linguistic variation at hand stems from the degree of "subjectivity" that a language entertains—the higher the degree of "subjectivity" of a language, wider and more profound are the ramifications of such speech act

participant (SAP) related phenomena and vice versa. Under our proposal, Japanese occupies the higher end of the subjectivity continuum while a language like Marathi occupies the lower end. Other languages under investigation lie mid-way along this continuum. Recall that in a highly subjective language like Japanese it is obligatory to use the passive when the speaker or the participant with whom the speaker empathizes with is on the receiving end of an action—affected or not affected by it—while in a less-subjective language like Marathi there is no such restriction.

It should be added that the repercussions of subjectivity are not confined to the use of passive alone but are also observed in other domains of the grammar such as using inverse construction in the case of directed motion event, and benefactive constructions in the case of transaction event (Kuno & Kaburaki 1977, Shibatani 2003), and expression of motion events, mental states, and deference (Uehara (to appear)). Kuno & Kaburaki (1977: 634), for example, observe that: “One can characterize Japanese, especially, colloquial Japanese, as a speaker-centered language, in that actions that have taken place around the speaker often must be described as actions towards or away from him, and/or as actions that have affected him favorably or adversely”. To buttress their claim they cite the following examples.

- (3) a. *John ga boku o tazuneta
 b. John ga boku o tazunete *kita*.
 c. John ga boku o tazunete *kureta*.
 d. John ga boku o tazunete *kite kureta*.

According to them, the speaker cannot use (3a) to describe John’s visiting him. He must use inverse construction such as (3b) to show that action was directed towards him or (3c) to express that he/she was favorably affected by the action or use a combination of the two as in (3d). Further, Kuno & Kaburaki (op. cit.: 633-34) also talk about the events that do not involve the speaker where similar empathy restrictions hold as exemplified in (4) below.

- (4) a. Taroo-ga Hanako-o tasuketa (objective description)
 b. Taroo-ga Hanako-o tasukete *yatta* (empathy with Taro)
 c. Taroo-ga Hanako-o tasukete *kureta* (empathy with Hanako)

They point out that the expression (4a) “represents an objective description of the situation, and because of this, it is seldom used in colloquial speech” (op. cit.: 634). Example (4b) and (4c), on the other hand, are subjective or empathy-loaded expressions and are most commonly used in colloquial speech.

To sum up, we claim that the cross-linguistic variation observed in the use of passive expression in a non-adversative context stems from the degree of subjectivity a language entertains. Japanese occupies the higher end of subjectivity cline while Marathi the lower end. Other languages at hand lie mid-way between these two poles. Let us take a brief stock of the

remaining two funct
 3.2 Agent defocusin
 Agent defocusing i
 while other function
 the sense of its om
 envisaged by Shibat

As shown in Ta
 Marathi. As argued
 are primarily recruit
 neutral passive in M
 subjectivity.

3.3 Attributive (AT)
 From Table 3 it is
 attributive passive is
 Marathi. If we assum
 Shibatani (1985) the
 devoid of an agent.
 nature.

4. Summary
 In this paper we add
 of passives. Through
 English and Marathi
 intensity in the langu
 from degree of subje

Given the limita
 and quantity, the co
 working hypotheses
 robust studies will co
 “subjective” nature o
 this onerous task to

remaining two functions.

3.2 Agent defocusing (AD) passives

Agent defocusing is an omnipresent function shared across the languages under discussion while other functions proposed by various scholars seem to vary from one language to other. In the sense of its omnipresence it can be considered as a primary function of the passive as envisaged by Shibatani (1985).

As shown in Table 3 this function plays a very important role in the usage of the passive in Marathi. As argued by Masuoka (1991) agent defocusing passives are neutral in meaning, which are primarily recruited to defocus or suppress the agent. We claim that the predominance of this neutral passive in Marathi follows from the fact that Marathi is less sensitive to the notion of subjectivity.

3.3 Attributive (AT) passives

From Table 3 it is clear that amongst the three functional domains under discussion, the attributive passive is the less frequently employed in all the languages. It is absent altogether in Marathi. If we assume that the primary/core function of the passive is agent defocusing a la Shibatani (1985) the marginality of attributive passives is quite straightforward since states are devoid of an agent. The statistical marginality of attributive passives bespeaks their peripheral nature.

4. Summary

In this paper we addressed the issue of correlation between the notion of subjectivity and the use of passives. Through a parallel corpora based study of the passive in Japanese, Korean, Chinese, English and Marathi we demonstrated that this correlation does not operate with equal intensity in the languages at hand. We claimed that the cross-linguistic variation observed stems from degree of subjectivity that a language entertains.

Given the limitations on the data used in the present study in terms of variables like genre and quantity, the conclusions reached herein are at best tendencies. Nonetheless, they are working hypotheses that can be empirically verified with the help of more robust studies. Such robust studies will confirm or disconfirm whether the tendencies observed herein stem from the "subjective" nature of the language per se or from the personal choice of a translator. We leave this onerous task to future research.

Notes:

*This is a revised version of the paper presented under the same title at the 30th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society held at Kansai University, on 4th-5th June 2005. We would like to thank the audience for their comments and suggestions. Needless to say, the responsibility of the remaining errors lies with the authors. The research reported here was supported in part by the 21st Century Center of Excellence (COE) Program (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) "Strategic Research and Education Center for an Integrated Approach to Language, Brain and Cognition", Graduate School of International Studies, Tohoku University (<http://www.lbc21.jp/>).

Selected references

- Finegan, E. 1995. Subjectivity and Subjectivisation: An Introduction. In Stein, Dieter, and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation*. Cambridge: Cambridge University Press. 1-15.
- Givón, T. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Givón, T. 1981. Typology and Functional Domains. *Studies in Language* 5.2: 163-193.
- Iwasaki, S. 1993. *Subjectivity in Grammar and Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kuno, S. & E. Kaburaki. 1977. Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry* 8.4: 627-672.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Kuroda, S. -Y. 1973. Where Epistemology, Style and Grammar Meet: A Case Study from Japanese. In Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc. 377-391.
- Li, C. & S. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Lyons, J. 1982. Deixis and Subjectivity: *Loguor, ergo sum?* In Jarvella, R. and W. Klein (eds.), *Speech, Places and Action: Studies in Deixis and Related Topics*. New York: John Wiley & Sons Ltd. 101-124.
- Oshima, D. (ms.) Syntactic Direction and Obviation as Empathy-Based Phenomenon: A Typological Approach. (<http://www.stanford.edu/~davidyo/docs/empinv.pdf>)
- Shibatani, M. 1985. Passive and Related Constructions. *Language* 61.4: 821-848.
- Shibatani, M. 2003. Directional verbs in Japanese. In Shay E. and U. Seibert (eds.) *Motion, Direction and Location in Language: In Honor of Zygmunt Frajzyngier*. Amsterdam: John Benjamins. 259-286.
- Uehara, S. 2001. Anaphoric Pronouns and Perspective in Japanese: A Text-Based Analysis. In Kaoru Horie and Shigeru Sato (eds.) *Cognitive-Functional Linguistics in an East Asian Context*. Tokyo. Kurosio Publishers. 35-53.
- Uehara, S. (to appear). Typologizing Linguistic Subjectivity: A Cognitive and Cross-Linguistic Approach to Grammaticalized Deixis. In Angeliki Athanasiadou, Constan Canakis and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 久野 暉 1986. 「受動文の意味—黒田説の再批判—」『日本語学』5巻2号: 70-87.
- 黒田 成幸 1985. 「受身文について久野説を解釈する—一つの反批判—」『日本語学』4巻10号: 69-76.
- 佐久間 鼎 1966. 『現代日本語の表現と語法』(くろしお出版, 1983 復刊).
- 益岡 隆志 1991. 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, 105-121.
- 松下 大三郎 1930. 『標準日本口語法』中文館書店(勉誠社, 1977 年復刊).
- 三上 章 1953. 『現代語法序説』くろしお出版.

主観性と受動

パルデシ・プラシ
prashant

日本語の受動
Kaburaki 1977,
動文は主体の総
いて主観的な表
的に表現した文
間は果たして普
本研究は受動
日本語の小説「
ド, マハーラー
用した。パラレ
なることが明ら
マラーティー語
被動作主の側に
ラーティー語が
本研究は、受動
「主観性の度合